

ウイグル文字モンゴル語の表記と音声

中村雅之

1. ポッペ (Nicholas Poppe) の説

Poppe 1954 はモンゴル語研究の最重要書の一つであり、その影響は非常に大きい。その説く所によれば、12世紀に導入されたと思われるウイグル文字によって記されたモンゴル語(先古典期文語)は、語頭の\*pや\*fを失った以外は古代モンゴル語の特徴をよく保存しているという。そして13-16世紀の中期モンゴル語(重要な資料として、漢字音訳『元朝秘史』、パспа文字資料、アラビア文字等による語彙集の三種を挙げる。いずれも13-14世紀の資料)は、語頭のh(<\*p or \*f)を保存し、古代モンゴル語の母音間の-γ-/g-が多くの語で消滅したとする。例えば、古代モンゴル語の「牛」\*püker or \*fükerは中期モンゴル語でhükerとなり、「山」\*ayulaはaulaとなった。

2. ポッペ説への疑問

ポッペの説は今でも多く利用されているようであるが、その立論はあまりにも強引であり、整合性がない。

第一に、モンゴル語の表記にウイグル文字が導入された時期を12世紀としたのは、その表記が古風である(とポッペには見えた)ことによる思いこみであって、『元史』の記述によれば13世紀初頭と考えるのが妥当である。従って、パспа文字が公布された1269年に先立つことわずか数十年に過ぎない。換言すれば、モンゴル語のウイグル文字表記とパспа文字表記はほぼ同時期に始まるのである。

第二に、古風であるはずのウイグル文字モンゴル語がなぜ語頭の\*pあるいは\*fを記さない(ゼロ表記である)のかという点が問題である。仮に12世紀以前の言語として古代モンゴル語というものを想定するのであれば、この語頭の\*pこそが最重要の特徴となるはずである。それが全く確認できないという一事をもってしても、ウイグル文字モンゴル語に古代モンゴル語の名残を見ようとしたポッペの試みは空しいものと言わざるを得ない。

第三に、ウイグル文字モンゴル語における母音間の-γ-/g-を全て音声の実態を伴うものと見なしているが、これについては慎重な検討を要する。{X}で翻字され得る字母は、音声的には無声の[q]と有声の[g]の双方を表記する(後者をポッペはγと表記する)。{K}と翻字され得る字母も同様に[k]と[g]に対応する。しかしまた、この二つの字母はともにゼロ音素をも表していたと考えることも可能である。つまり、「ayula」「degere(上)」は実際には[aula][de:re]のような音声を意図していた。{X}{K}はともに無声・有声・ゼロという三種の音声に対応していたという仮説である。そのように考えれば、同時代資料であるパспа文字やアラビア文字、あるいは漢字音訳の表記と何らの齟齬をきたすこともなくなる。

### 3. 母音間の-\*p-について

ウイグル文字モンゴル語における母音間の-γ-/g-の中には「ayula」「degere」のように13世紀においてすでにゼロ音素であったものが含まれると私は考えているが、さらにその起源を遡れば、母音間の-\*p-が消滅したことによる二重母音化・長母音化が相当数含まれるのではないかと想像する。

日本語において、「恋」が\*kopi>\*koϕi>\*kowi>koi となって母音間の-\*p-を失ったのと同様の变化がモンゴル語にも起こったとすれば、-γ-/g-という見かけ上の表記にかかわらず、それが歴史的に-\*p-に遡る例もかなり存在することが予想されるのである。この母音間の-\*p-は中期モンゴル語ではおおむね消滅しているが、まれに-b-や-h-で現れることがある。例えば、仮定を表す副動詞形は、パスパ文字資料で「-·asu/-·esu」、『元朝秘史』で「-巴速/-別速」および「-阿速/-額速」、文語形が「-basu/-besü」および「-yasu/-gesü」である。また、「保護する」を意味する語根は、パスパ文字資料で「ih·e-」([ihe:]), 『元朝秘史』で「亦協-」、文語形が「ibege-」である。後者の例は、日本語における「母(はは)」や「頬(ほお、ほほ)」がやはり例外的に母音間に-h-が現れるのと似ている。-\*p-の変化はモンゴル語と日本語で興味深い類似を示す。

### 4. まとめ

ポッペはウイグル文字モンゴル語における母音間の-γ-/g-という表記をそのまま有声破裂音を表したものと見なした。しかし、文字と音声の関係はそのように常に単純とは限らない。ウイグル文字表記における母音間の-γ-/g-に相当する部分は、同時代のパスパ文字および漢字音訳などでは、時に破裂音であるが時にゼロ音素である。したがってウイグル文字表記の-γ-/g-にもゼロ音素としての用法があったと考えれば、対応はごく自然なものとなる。

要するに、ウイグル文字モンゴル語も全体としては中期モンゴル語の資料にほかならないのであり、そこに古代モンゴル語の音韻特徴を見出すことは難しい。

文献：

Poppe, Nicholas. 1954, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.